

令和 6 年 9 月 30 日現在

機関番号：32652

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A））

研究期間：2019～2023

課題番号：18KK0349

研究課題名（和文）初学者における傾聴のうわすべりの解明とその回避のための比較文化臨床心理学的検討

研究課題名（英文）Comparative cultural clinical psychology research based on international joint research aiming at elucidation and avoidance of superficial listening in inexperienced therapists

研究代表者

花田 里欧子（Hanada, Ryoko）

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：10418585

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,100,000円

渡航期間：12ヶ月

研究成果の概要（和文）：国内外の初学者における傾聴のうわすべりの解明とその回避を目指し、比較文化臨床心理学的検討を通じて、次の成果を得た。1.従来活字化・言語化が困難とされてきた、臨床心理面接における傾聴に基づく介入のタイミングやコンテキストに関する文化的知識の実際的な運用の拡大・深化を行った。2.セラピストの介入に関わる発話・身振り・口振りや傾聴の評価値との関連を、母語ごとの傾聴における多種多様な信号として処理する技術により、複合的な構造の記述・伝達を行った。3.複数機関の海外共同研究者と協働して傾聴の知識発見をすすめ、各国の臨床心理学内外の対話実践者にとって効果的な介入に関する多面的・専門的な知識の共有を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

複数の母語話者による傾聴についての比較文化臨床心理学的検討の学術的意義や社会的意義は次の通りである。1.文化に固有の言語形態をもとに臨床心理面接がどのような傾聴によって行われているのかについて相対的な可視化・意識化をすすめた。2.介入に関わる発話・身振り・口振りや傾聴の評価値との関連を明らかにし、色々な母語による傾聴という複雑な相互作用過程のエビデンスの確立・蓄積をすすめた。3.協働的・発展的に心理臨床的介入を参照・応用することで、保健医療、福祉、教育その他の分野の各種コンサルティングやインタビューにおいて、建設的な傾聴を新たに設計でき、国を超えたサービスの質の確保・供給をすすめた。

研究成果の概要（英文）：To elucidate and avoid superficial listening among inexperienced counselors in Japan and abroad, a comparative cultural clinical psychology study obtained the following results. 1.Expanded and deepened the practical application of cultural knowledge about the timing and context of interventions based on listening in clinical psychological interviews, which has traditionally been difficult to put into print and language. 2.The relationship between the therapist's intervention-related speech, body language, and oral gestures, and the evaluation of listening, was described and communicated as a complex structure using technology that processes a wide variety of signals in listening in each native language. 3.Collaborated with international collaborators from multiple institutions to discover knowledge about listening and share multidimensional and specialized knowledge about effective interventions for dialogue practitioners within and outside of clinical psychology in countries.

研究分野：臨床心理学

キーワード：傾聴 初学者 うわすべり 臨床心理学 臨床心理面接コーパス 感情推移観測システム(EMO system)  
認知科学 聴覚・音声学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

基課題の進捗状況から、傾聴には文化的特徴が見られることを新たに確認している。そもそも傾聴とは、アメリカの英語母語話者である Carl Rogers が提唱し、自身が実施した臨床心理面接のうち有効であった事例に共通して見られた、聴く側の態度のことである。しかし、初学者がテキストや講義等から傾聴のなんたるかを学んだところで、それを支える文化に固有の言語形態までを理解して、実際どのように聴けばよいのかを修得・実行するのは容易ではない。そのため英語母語話者による傾聴をそのまま鵜呑みにするのではなく、日本語母語話者特有の傾聴に関する知識の獲得・提供が不可欠である。これを達成するには、比較文化臨床心理学の観点から、日本語母語話者と他母語話者の臨床心理面接について傾聴の文化的な共通性と多様性を浮き彫りにしていくような研究が必要であるが、未検証のままである。そこで、傾聴の文化的特徴に関する国際共同研究を通じて、基課題の研究計画を格段に発展させ、各言語形態におけるセラピストの傾聴がクライアントの心持ちにどのようなインパクトを与えるのかについて、連続的・客観的な計測によりエビデンスのある実証・実践を行わなければならない。

## 2. 研究の目的

本国際共同研究は、基課題で提案する初学者における傾聴のうわすべりの解明とその回避の持続性を、日本語母語話者以外の臨床心理面接にも発展させることで、傾聴の文化的な共通性と多様性を明らかにし、解決を促進する。これまでの基課題の取り組みより、傾聴には文化的特徴が見られることを新たに確認しつつある。たとえば傾聴に際して、日本語母語話者ではセラピストは黙ってクライアントの話にうなずき相鉋を打つのにに対し、英語母語話者ではセラピストは積極的にクライアントに質問したり確認したりしている。そのため日本語母語話者である初学者は、英語母語話者による臨床心理面接の教材等において、セラピストが傾聴していないように感じたりそのままクライアントに適用することに戸惑ったりといったズレが生じることがある。国内外の臨床心理面接の効果研究から、傾聴はセラピストやクライアントの関心・背景によらない最も基本的・普遍的な態度とされ、さらに文化をふまえた知識がエビデンスに基づき示される必要があるが、未検証のままである。

## 3. 研究の方法

(1)基課題及び海外の臨床心理面接コーパスに対し、本手続きを適用、比較文化臨床心理学の枠組を構築、(2)基課題の感情推移観測システム(EMO system)を海外の関連研究者と議論・共有、(3)共同成果発表を計画する。具体的には、(1)については、渡航先外国機関で諸外国語を母語話者とするセラピストの臨床心理面接を新たにコーパスとして収録し、基課題で提案する傾聴のうわすべりの解明とその回避が実現可能かどうかを確認する。(2)については、渡航先外国機関の関連研究者を集め、検討を実施する。(3)については、日本から持参する臨床心理面接コーパス及び(1)に対する感情推移観測システム(EMO system)による評価を比較し、成果を発表する。

## 4. 研究成果

- (1) 従来活字化・言語化が困難とされてきた、臨床心理面接における傾聴に基づく介入のタイミングやコンテクストに関する文化的知識の実際的な運用の拡大・深化を行った。花田(2020a)では、花田、入野、古山、井上、& 門田(2019)や仁田、入野、古山、花田、井上、門田、& 熊野(2020)をふまえ、その適用場面や活用方法の現在の技術の到達点について紹介し、シンポジウム形式で指定討論を行った。情報処理技術を臨床心理学的なアセスメントに応用することで、従来の方法では検出できなかったリスクの発見や、早い段階からの支援提供が可能となり、アセスメントへの応用のみならず、介入への応用についても検討が行われ始めている。一方で、現在の技術において、臨床心理学的な実践の全てを人工知能に置き換えることは現実的ではなく、人工知能の強みを生かした適用場面や活用方法の可能性について検討した。その結果、非身体/言語と身体/非言語の取扱い、ビッグデータとスモールデータの活用、アセスメントと介入のありかた、リテラシー・バイアスの問題、アノテーションにおける人手・目視と機械化・自動化・効率化の課題、訓練・教育への応用について議論を深めた。花田(2020b)では、コミュニケーション研究の実際とその心理臨床への応用についてワークショップを行った。コミュニケーション研究の実行にともなう方法論等の諸特性をふまえ、ヴィクトリア大学グループによるコミュニケーション研究、2者間や3者間以上のコミュニケーションに関する先行研究をレビューした。その上で、花田、入野、古山、井上、& 門田(2019)や仁田、入野、古山、花田、井上、門田、& 熊野(2020)のほか、臨床心理面接中の相互作用を実証的に検討するものとして、面接の音声-加速度同時記録システムによる計測評価、面接におけるノート使用のインタラクションへの影響評価、スキーマ療法における感情表出の定量化について紹介し、参加者との質疑応答を通じ、今後の方向性や課題について検討した。以上をめぐって、海外の関連研究者と議論・共有を行い、比較文化臨床心理学の枠組を構築し、共同成果発表を計画した。
- (2) セラピストの介入に関わる発話・身振り・口振りや傾聴の評価値との関連を、母語ごとの傾聴における多種多様な信号として処理する技術により、複合的な構造の記述・伝達を行った。花田、入野、古山、井上、& 門田(2019)では、傾聴を進行中の臨床心理面接において生じる感情にかかわる連続的な事象としてとらえ、その評価について検討した。このため

のアプローチとして次の手順で実験を実施し、評価の実際と課題について明らかにした。研究1において、臨床心理面接コーパスを対象としたEMO systemによる評価を試みることで、傾聴の連続的評価の実際を示した。次に、研究2では、研究1によって得られた傾聴の連続的な評価と、従来の要素的なタグ評価とを比較することで、EMO systemによる傾聴評価の特徴を示した。最後に、研究3において、EMO systemの評価者として、臨床心理士と初学者とを比較することで、評価者属性が傾聴評価に与える影響を示した。仁田、入野、古山、花田、井上、門田、& 熊野(2020)では、スキーマ療法にEMO systemを適用し、感情表出を測定する方法を開発した。スキーマ療法とは、認知行動療法、精神分析、アタッチメント理論、体験療法の要素を統合した心理療法であり、患者のもつ幼少期の逆境体験によってつくられた自滅的な認知・感情・対人関係のパターンである「早期不適応的スキーマ」を治療のターゲットとする。幼少期に満たされなかった欲求が、満たされるという感情的な体験である修正感情体験は重要な機序の一つであるが、患者の感情表出の程度と治療効果の関連や、患者の感情表出を促進する治療者の関わりについては不明であった。そこで、EMO systemを用いて治療効果や治療者の関わりとの関連を検討した。その結果、EMO systemによって特定されたポイントにおいて、臨床的に有意な感情表出が示唆された。Inoue, Irino, Furuyama, & Hanada(2021)では、臨床心理面接におけるセラピストとクライアントの2人の対話における頭部の動きを、ビデオ撮影と頭部装着型加速度センサーを用いて分析した。加速度計はメンタルヘルス領域で活用されているが、メンタルヘルス関連のコミュニケーションの分析には利用されていない。そこで、臨床心理面接における対話の状態と、時間的に変化する頭のうなずきや動きのパターンとの関係を調べた。頭のうなずきには手作業で注釈が付けられ、頭の動きは加速度計を用いて計測された。ビデオデータから取得したアノテーションに基づき、頭部のうなずき回数を分析した。加速度計のデータを用いて、2人の参加者の頭の動きの相互相関分析を行った。2つの事例研究の結果から、上向きと下向きのうなずき回数のパターンは、カウンセリング対話におけるステージの移行を反映している可能性があること、また、頭部の動きの同期のピークは、対話における強調と関連している可能性があることが示唆された。Hanada(2021)では、花田、入野、古山、井上、& 門田(2019)や仁田、入野、古山、花田、井上、門田、& 熊野(2020)、Inoue, Irino, Furuyama, & Hanada(2021)をふまえて、臨床心理面接における傾聴の時系列的連続評価法の報告と新たに構築した多言語傾聴コーパスを用いた傾聴の再評価の提案を国際会議にて行った。本発表では、心理臨床家の育成や資質向上において、効果的な傾聴を支援することを目的に、これまで構築した臨床心理面接コーパスとEMO systemを用いた傾聴の学習支援システムについて報告した。これは、傾聴を臨床心理面接中に発生する一連の感情的なイベントとして認識するもので、その評価方法について議論した。さらに、日本語母語話者を参加者とする臨床心理面接コーパスに加えて、International Comparison Experiment on Listeningによって構築した多言語傾聴コーパスを用いて傾聴を再評価することの提案を行い、参加者とともに活用の方角性について展望した。

- (3) 複数機関の海外共同研究者と協働して傾聴の知識発見をすすめ、各国の臨床心理学内外の対話実践者にとって効果的な介入に関する多面的・専門的な知識の共有を行った。SafeSpace/GhallKemm(2023)では、(1)と(2)の成果をもとに、渡航先外国機関であるCenter for Resilience and Socio-Emotional HealthとMalta Foundation for the Wellbeing of Societyと協働で、若者向けにメンタルヘルス用携帯電話アプリを開発した。SafeSpace/GhallKemmは、18歳以上の若者向けの英語とマルタ語によるオープンアクセスの無料デジタルツールで、若者が自分の感情を管理し、自傷行為への衝動を減らすのに役立つモバイルアプリである。さまざまな若者のメンタルヘルスのニーズに対応することを目指しており、あらゆる社会的環境にある若者に、気分の特定、管理、修正をサポートできるよう、気分の落ち込みを軽減するための適切な活動と、彼らの健康状態を監視したり、精神的健康上の問題の重症度に応じて地域の支援サービスにアクセスしたりするためのリソースを提供している。無料でアクセスできるこのアプリは、AppleストアとGoogle Playストアの両方で英語とマルタ語で入手できる。花田(2023)では、臨床心理面接プロセスに関する多様な研究の可能性について検討した。近年、複数の方法を組み合わせた計測や機械学習モデルにより、マルチモーダルな側面から臨床心理面接プロセスの研究が行われるようになった。本シンポジウムでは、臨床心理面接プロセスの定量的な測定を行った研究、臨床心理面接において「腑に落ちる感覚」を質的に評価する研究、近年工学領域で盛んなf-NIRSを用いたセラピスト・クライアント間の同時脳活動測定の研究に関するレビューとその応用可能性に関する話題提供をめぐり、シンポジウム形式で指定討論を行った。その結果、セラピスト教育への展開、心理療法の定義、実験室と現場の接続、について質疑を行ったのち、全体討議として、臨床心理面接において「良い展開である」とはどういうことか、それにとともなう傾聴のありかたをめぐって、議論を深めた。

#### <引用文献>

花田里欧子, 入野俊夫, 古山宣洋, 井上雅史, & 門田圭祐. (2019). 臨床心理面接における「傾聴」の再考に向けた時系列連続評価アプローチの提案. 東京女子大学心理臨床センター紀要, 9, 41-62.

花田里欧子. (2020a). 情報処理と臨床心理学 現在の到達点とこれから . In 日本ブリーフセラピー協会第 12 回学術会議大会企画シンポジウム(話題提供者:坂本真樹, 横谷謙次, 高木源).

花田里欧子. (2020b). 最新のコミュニケーション研究とブリーフセラピー. 日本ブリーフセラピー協会第 12 回学術会議ワークショップ.

仁田雄介, 入野俊夫, 古山宣洋, 花田里欧子, 井上雅史, 門田圭祐, & 熊野宏昭. (2020). 感情推移観測システムによるスキーマ療法における感情表出の定量化に関する予備的研究. In 早稲田大学応用脳科学研究所 応用脳科学カンファレンス.

Hanada, R. (2021). Linguistic Circle Event - A Proposal on Reassessing "Listening" in Clinical Psychology Psychotherapy Sessions through a Chronologically Continuous Evaluation Approach and a Multilingual Listening Corpus. In Linguistics Circle Event. Msida, Malta. Retrieved from <https://www.um.edu.mt/newspoint/events/um/2021/05/linguistics-circle-listening-psychology>

Inoue, M., Irino, T., Furuyama, N., & Hanada, R. (2021). Observational and Accelerometer Analysis of Head Movement Patterns in Psychotherapeutic Dialogue. *Sensors*, 21(9), 3162. <https://doi.org/10.3390/s21093162>

SafeSpace/GhallKenn (2023)  
<https://mfws.org.mt/safespace-ghallkenn/>  
<https://www.um.edu.mt/newspoint/news/2023/01/safespace-ghallkenn-a-new-mobile-phone-app>

花田里欧子. (2023). 心理療法プロセスに関する多様な研究の可能性. In 日本心理学会第 87 回大会公募シンポジウム(企画代表者:中村菜々子, 話題提供者:小森政嗣, 重松 潤, 岩山孝幸, 指定討論者:実吉綾子).

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Ryoko Hanada	4. 巻 54
2. 論文標題 Special Issue: The Ontology of Memory and the Horizon of History, Part III Emerging "Stories" Surrounding Sexual Abuse Lawsuits: Response to Dr. Haaken's Keynote Lecture	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ZINBUN	6. 最初と最後の頁 19-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 14
2. 論文標題 島尾マヤへの家族臨床的接近(5)－Identified Patientの概念整理とその検証に向けて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 13
2. 論文標題 島尾マヤへの家族臨床的接近(4)－分節化/punctuationによる循環と変化	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 25-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Inoue, M., Irino, T., Furuyama, N., & Hanada, R.	4. 巻 21(9)
2. 論文標題 Observational and Accelerometer Analysis of Head Movement Patterns in Psychotherapeutic Dialogue	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Sensors	6. 最初と最後の頁 3162-3162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/s21093162	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤宏平, 鴨志田冴子, 二本松直人, 坂本一真, 櫻庭真弓, 長谷川啓三, 生田倫子, 花田里欧子, 横谷謙次, & 狐塚貴博	4. 巻 14
2. 論文標題 FTとCBTの心理療法家における肯定的・否定的内容の微視的分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Interactional Mind 14 (2021)	6. 最初と最後の頁 126-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 1-2月号
2. 論文標題 システム論による家族トラブルの分析(アセスメント)と解決の具体策	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 隔月刊 地域連携 入退院と在宅支援	6. 最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 12
2. 論文標題 島尾マヤへの家族臨牀的接近(3)ー「マヤのファックス交信録」からたどる島尾マヤFAX資料デジタルアーカイブの試み	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Wakashima, K., Sakamoto, K., Takagi, G., Kamoshida, S., Hiraizumi, T., Itakura, N., Ikuta, M., Sato, K., & Hanada, R.	4. 巻 11
2. 論文標題 Examination of the effect of a marital symmetrical communication pattern and the amount of communication on problem-solving	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Brief Therapy and Family Science	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.35783/ijbf.11.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takagi, G., Wakashima, K., Sato, K., Ikuta, M., Hanada, R., & Hiraizumi, T.	4. 巻 11
2. 論文標題 The relationship between fear of COVID-19 and coping behaviors in Japanese university students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Brief Therapy and Family Science	6. 最初と最後の頁 42-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.35783/ijbf.11.1_42	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 10
2. 論文標題 鳥尾マヤへの家族臨床的接近(2)ー鳥尾マヤ資料目録作成の試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 9-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 12
2. 論文標題 更新するブリーフセラピー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Interactional Mind X (2019)	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子, 入野俊夫, 古山宣洋, 井上雅史, & 門田圭祐	4. 巻 9
2. 論文標題 臨床心理面接における「傾聴」の再考に向けた時系列連続評価アプローチの提案	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京女子大学心理臨床センター紀要	6. 最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 11
2. 論文標題 マスターセラピストと公認心理師	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Interactional Mind XI (2018)	6. 最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花田里欧子	4. 巻 11
2. 論文標題 島尾マヤへの家族臨床的接近(1)ー伸三、登久子、真帆と一緒に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Interactional Mind XI (2018)	6. 最初と最後の頁 127-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 花田里欧子
2. 発表標題 リフレクティング・プロセス
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第15回学術会議 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 花田里欧子
2. 発表標題 心理療法プロセスに関する多様な研究の可能性
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会公募シンポジウム
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 若島孔文, 坂本一真, 高木源, 鴨志田冴子, 平泉拓, 板倉憲政, 生田倫子, 佐藤宏平, & 花田里欧子
2. 発表標題 統合情報理論を家族研究へ応用する試みー夫婦の役割・個性・発想の差異に着目してー
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第13回学術会議
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 花田里欧子
2. 発表標題 リフレクティング・プロセス
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第14回学術会議 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hanada, R.
2. 発表標題 Ontology of Memory and Horizon of History III
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所・共同研究班「家族と愛の研究」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hanada Ryoko
2. 発表標題 A Proposal on Reassessing “Listening” in Clinical Psychology Psychotherapy Sessions through a Chronologically Continuous Evaluation Approach and a Multilingual Listening Corpus
3. 学会等名 Linguistics Circle Event. Msida, Malta. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 花田里欧子
2. 発表標題 最新のコミュニケーション研究とブリーフセラピー
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 花田里欧子
2. 発表標題 情報処理と臨床心理学－現在の到達点とこれから－
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第12回学術会議（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 仁田雄介, 入野俊夫, 古山宣洋, 花田里欧子, 井上雅史, 門田圭祐, & 熊野宏昭
2. 発表標題 感情推移観測システムによるスキーマ療法における感情表出の定量化に関する予備的研究
3. 学会等名 早稲田大学応用脳科学研究所 応用脳科学カンファレンス
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 若島孔文, 坂本一真, 平泉拓, 板倉憲政, 生田倫子, 佐藤宏平, & 花田里欧子
2. 発表標題 統合情報理論を夫婦および家族へ応用する試み－コミュニケーション・パターンに着目して－
3. 学会等名 日本ブリーフセラピー協会第11回学術会議
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 長谷川 啓三、花田 里欧子、佐藤 宏平	4. 発行年 2024年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 200
3. 書名 事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談：小学校編 第3版	

1. 著者名 日本ブリーフセラピー協会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 160
3. 書名 Interactional Mind 12(2019)特集:ブリーフセラピーテキスト&ワーク【改訂版】	

1. 著者名 日本家族心理学会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 520
3. 書名 家族心理学ハンドブック	

1. 著者名 ジョン・W・ソバーン、トーマス・L・セクストン、若島 孔文、野口 修司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 家族心理学	

1. 著者名 長谷川 啓三、花田 里欧子、佐藤 宏平	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 200
3. 書名 事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談 小学校編 [改訂版]	

1. 著者名 長谷川 啓三、佐藤 宏平、花田 里欧子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 事例で学ぶ 生徒指導・進路指導・教育相談 中学校・高等学校編 [第3版]	

1. 著者名 若島 孔文、野口 修司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 テキスト家族心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>SafeSpace / G&amp;#295;allKenn  <a href="https://mfws.org.mt/safespace-ghallkenn/">https://mfws.org.mt/safespace-ghallkenn/</a>  <a href="https://www.um.edu.mt/newspoint/news/2023/01/safespace-ghallkenn-a-new-mobile-phone-app">https://www.um.edu.mt/newspoint/news/2023/01/safespace-ghallkenn-a-new-mobile-phone-app</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	C e f a i C a r m e l  (Cefai Carmel)	U n i v e r s i t y o f M a l t a ・ D e p a r t m e n t o f P s y c h o l o g y ・ P r o f e s s o r	
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	N a k a m u r a K a r e n  (Nakamura Karen)	U C B e r k e l e y ・ D e p a r t m e n t o f A n t h r o p o l o g y ・ P r o f e s s o r	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
マルタ	University of Malta			
米国	University of California, Berkeley			